

# Webエクスペリエンス管理 (CMS) と ファイル共有で拓く新しいビジネスの形 Oracle Content and Experienceが提供する価値とは？

日本オラクルの「Oracle Content and Experience」は、Oracle Cloud Platform上で稼働するPaaS製品だ。「コンテンツコラボレーション」「Webエクスペリエンス管理 (CMS)」という大きく2つの機能を一体的に提供してくれる。そのメリットについて、2つの事例とともにひも解いていこう。

## 新しいブランドサイトの立ち上げに Oracle Content and Experienceを活用



NTTデータ先端技術株式会社  
オラクル事業部  
営業担当 クラウド営業グループ  
担当課長 田村広朗氏

まずはNTTデータ先端技術株式会社がブランドサイトを立ち上げた事例から見ていく。同社のオラクル事業部営業担当 クラウド営業グループ 担当課長 田村広朗氏は、デジタルソリューション「AXIASTA」のブランドサイトを立ち上げるにあたり、「人員リソースの制約」「サイトの迅速な立ち上げ」「トライアル&エラーが許される範囲での投資」という3つの悩みを抱えていたことを打ち明けた。

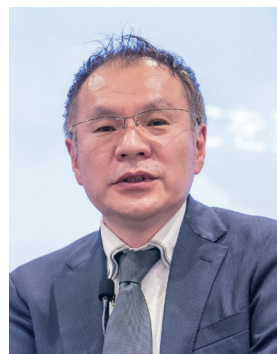
その際は、コーポレートサイトを活用することが第一の選択肢であったが、それだとワークフローが複雑になり、迅速な立ち上げだけでなく、その後のタイムリーな情報発信も難しくなることが予想された。とはいえ、サーバー購入といった環境を整備するところからサイト構築を始めると、時間もお金もかかりすぎる。

この悩みを解決したのが、クラウド基盤で稼働するOracle Content and Experienceである。エンジニアでなくてもWebサイトを迅速に構築できること、価格体系がスモールスタートに適していることが決め手になって、Oracle Content and Experienceを導入したと田村氏は話す。

導入を決定したのは2018年7月。その10月には最初のサイトができていた。その後、2019年の2月から3月にかけて、オラクルが提供する無料のサービスを活用し、SSL証明書の取得とOracle Cloudドメインから独自ドメインへの切り替えを行った。



サイトのデザインから制作、付帯事務に至るまでを担当したのは、同社の顧客営業グループ チーフセールス 菅野卓哉氏で、これらの作業を一人で行ったという。菅野氏は、「Oracle Content and Experienceが用意しているテンプレートとコンポーネントを使い、カスタマイズを一切せずに制作した。当時は試行錯誤を繰り返したので少し時間がかかったが、コンテンツが揃っていれば、現在は1日で同じサイトができると思う」と語った。



NTTデータ先端技術株式会社  
顧客営業グループ  
チーフセールス 菅野卓哉氏

導入成果は、情報発信をタイムリーにできるようになったことだという。今後はコンテンツを充実させ、サイトを進化させることを見据える。「まだ小規模なサイトだが、興味を持ったビジターがすぐに答えを得られるようにしていきたい」と菅野氏は抱負を語った。

## 社内外を問わず簡単にファイルを共有できる Oracle Content and Experienceを導入

次は京成電鉄株式会社がOracle Content and Experienceを導入した事例を紹介しよう。経営統括部 ITシステム・情報セキュリティ担当 加藤晃大氏によると、京成電鉄の事業構造は鉄道事業



京成電鉄株式会社 経営統括部  
ITシステム・情報セキュリティ担当  
加藤晃大氏

が7割を占める。かねてからのインバウンド旅行者の増加で、成田空港へのアクセス路線を提供する鉄道事業は右肩上がり成長し、海外からの乗客との繋がりが増えたことが、Oracle Content and Experienceを使っての仕組み整備のきっかけになったという。

加藤氏は、導入に至るまでの課題として、プロモーションのために制作する刊行物の編集過程におけるメールのやり取りの課題を指摘した。メールだ

と外部のパートナーも含め複数の組織が関わることが多く、ファイルのやり取りが複雑になっていたのだ。また、画像や動画のように大容量データのやり取りで無料のデータ共有サービスを使うことも、セキュリティの観点から見ることができない問題であった。

これらの問題解決のためのテクノロジーを探す過程で、同社はファイル共有サービスに目を付けた。他社のサービスも検討したが最終的にOracle Content and Experienceを選択した。その決め手は、NTTデータ先端技術と同様に柔軟な料金体系にあったという。従量制課金であれば、繁忙期の数カ月しか使わない部署にも気兼ねなく提供できると考えたのだ。

2018年5月にOracle Content and Experienceの導入を決定し、翌月から二つの部門が使い始めた。その一つは外部のメディアとのやり取りを頻繁に行う広報部門である。これまではメディアからリクエストがあるたびに対応していたが、Oracle Content and Experienceのフォルダに関連ファイルを入れて、リンクからファイルを入手してもらうことにした。もう一つはインバウンド旅行者を担

当する営業課である。この部門でも刊行物やCMを制作しており、同様にファイル共有で煩雑な業務を効率化した。

加藤氏は「メールのやり取りがなくなり、部門間のコラボレーションができるようになった」と成果を実感している。現在のユーザー数は約120人。ファイル共有のみで使っているが、関係部門からは煩雑なメールのやり取りが減ったことを評価してもらえているという。

さらに用途を拡大することにも意欲的だ。加藤氏は「担当部門にニーズを確認し、社内向けのポータルサイトやプロモーション用の臨時サイトの制作での活用を検討したい」と展望を語った。

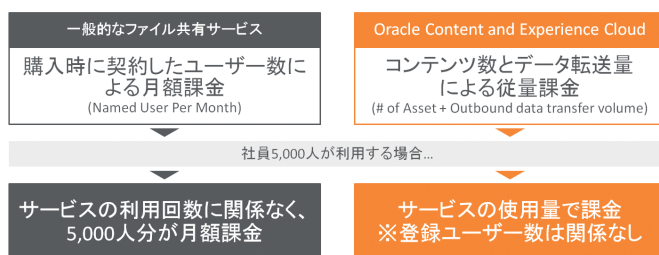
## スモールスタートに適したオラクルの PaaS/IaaS料金体系

この2社の事例で共通するのは、予算の制約がある状況で問題解決ができるテクノロジーを探している中、Oracle Content and Experienceの柔軟な価格体系が双方のニーズに合致したという点だ。2017年9月、日本オラクルはOracle CloudのPaaSとIaaSに関して、実質的に利用料金の大幅な引き下げとなる新しい料金体系を導入している。

Oracle Content and Experienceは使ったぶんだけの課金となるが、プリペイド支払方式の「Universal Credits Monthly Flex」では、事前に一定の月額クレジット(月額12万円～)を購入すると、そのクレジットの範囲内でPaaS/IaaSのすべてのサービスを自由に利用できる。一般的な従量課金方式の「Pay As You Go」(PAYG、ペイジー)も用意されているものの、最低1年の契約を継続することを条件に「Universal Credits Monthly Flex」を活用した方が、PAYGよりも格安にクラウドを利用できる。利用できるサービスには、コンテンツ管理やファイル共有だけでなく、データマネジメントやアナリティクスなども含まれる。

このように、ゼロからOracle Content and Experienceを使う場合でも少ない投資から始められるのは、大きな特徴といえる。日本オラクルが料金体系を刷新したのは、企業にクラウドのよさを実感してもらうと同時に、ITコストの全体最適化が図れるようにしてほしいと考えたためだ。スモールスタートで利用したいテクノロジーがある企業は、試してみる価値があるだろう。

### Oracle Content and Experience課金モデル



※本カタログに掲載された内容は2019年8月現在の情報で、予告なく仕様などを変更する場合がございます。

※OracleとJavaは、Oracle Corporationおよびその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

Copyright © 2019, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved. Oracle and Java are registered trademarks of Oracle and/or its affiliates. Other names may be trademarks of their respective owners.

ORACLE®

### ▶お問い合わせ先 日本オラクル株式会社

〒107-0061

東京都港区北青山2-5-8 オラクル青山センター

URL <https://www.oracle.com/jp/>

TEL 0120-155-096